

## インドシナ美術学校とフランス植民地政策 — 福岡アジア美術館「ベトナム近代絵画展」に寄せて —

松 沼 美 穂

### はじめに

1. フランスのインドシナ観
2. 1920年代の統治方針
  - (1) アルベール・サロー
  - (2) 「フランス・ベトナム協力」
3. インドシナ美術学校
  - (1) 設立の経緯
  - (2) 目的と運営
  - (3) 教育の成果
4. 1930年代の変化  
おわりに

### はじめに

2006年6月から7月にかけて福岡アジア美術館で、日本ではじめてベトナム近代美術を紹介する巡回展の一環として、「ベトナム近代絵画展 花と銃 イン ドシナ・モダンの半世紀」が開催された<sup>1)</sup>。この展覧会の英語名称は“50 Years of Modern Vietnamese Paintings: 1925-75”である。ベトナム美術史上の近代は、1925年にハノイにインドシナ美術学校 École des Beaux Arts de l'Indo-chine<sup>2)</sup>が開かれたことを重要な契機として開始したと定義されているのである。この学校はフランス植民地支配の下で、インドシナ総督府の発した法規に基づいて、植民地統治機構の一環として設立され運営されたものであった。ベトナム美術の近代の始まりを画したと位置づけられるこの学校と、フランスの植民地統治方針との関連を理解することが、本稿の目的である。

フランス植民地に関する歴史研究において教育政策は、支配者の統治イデオロギー、目的と効果、対象となった現地住民との関係といったさまざまな角度から取り上げられてきた。インドシナの教育は、初等教育の普及や高等教育機関の建設など他の植民地にはない特色がみられたこともあり、少なからぬ関心を集めてきた。しかしそれらの教育史研究において、芸術教育が本格的な言及の対象とされることはこれまでなかった<sup>3</sup>。またインドシナ美術史研究の文脈では、作家や表現技法に主たる関心が向けられ、フランスの植民地統治方針という視野のなかでこの学校を検討する視点は弱い<sup>4</sup>。本稿では、インドシナ美術学校の成立と展開が、1920年代から30年代の植民地統治方針と密接に関連するものであったことを明らかにしたい。

植民地化という現象が、支配・抑圧と従属あるいは抵抗といった二項対立的な図式に還元し得るものではなく、さまざまな方向での影響と反応の関係性を生み出す遭遇であったことが指摘されるようになって久しく、文化史はそうした関係にとりわけ注目してきた研究領域であった。本稿は、植民地化の文脈において創り出された文化的作品そのものではなく、創造の舞台となる環境を生んだ政策という視点から、植民地での人と文化の出会いと交錯を考察しようとする、ささやかな試みである。

## 1. フランスのインドシナ観

フランスは17世紀から北米大陸、カリブ海島嶼、インド亜大陸およびインド洋島嶼での拠点建設と植民地経営に着手するが、これらの領土は、18世紀の対英抗争とフランス革命およびナポレオン戦争の結果、島嶼部を除いてほとんど失われた。しかし1830年のアルジェリア侵略を端緒として新たな植民地帝国の建設が始まり、アジア・アフリカの広大な領域を配下に収めた。インドシナ支配は1850年代のベトナム南部侵略に始まり、1860年代にカンボジアを保護国とし、1885年に清仏戦争の結果締結された天津条約で、清朝はベトナム阮王朝に対する宗主権を放棄し、フランスの保護権を認めた。翌1886年にはカンボジアとベトナム南・中・北部を合わせたフランス領インドシナ連邦が創設され、1891年にラオスを加えられた。山岳地帯の武力抵抗をほぼ鎮圧し軍事征服から植民地統治・経営へと重心が移るのは、世紀転換期のドゥメール Paul Doumer 総督(在職1897-1902)の時代である。フランス領インドシナの建設は、欧米列強諸国によるアフリカ大陸や太平洋島嶼の分割といった、地球全体を覆う帝国主義の動きの一環をなすものであった<sup>5</sup>。

ところで、同時代のインドシナの支配においても今日に至る歴史研究のなか

でも、インドシナといっても実質的にはほぼベトナムだけを対象にしている場合が多いという現実がある。沿岸部でアクセスが相対的に容易なことに加え、人口が多く農業を基盤とする商品経済が発達し、中華帝国の強い影響下で君主制と官僚制が構築されていたベトナムに、フランスの関心と努力が傾けられたためである。インドシナニベトナムという図式は、このたびの展覧会の名称がベトナム美術を掲げつつ副題でそれをインドシナと等値していることにも、端的に現れているといえる。

19世紀後半に征服したインドシナに対し、フランスはどのような視線を向けていたであろうか。その土台に、古い固有の文明をもつアジアという基本認識があったことを、まず指摘したい。中国の思想や工芸が18世紀フランスの啓蒙思想やベルサイユ宮廷文化に与えた影響や、19世紀後半のジャポニズムはよく知られている。ヨーロッパより古い文明をもつ帝国である中国の影響圏内にあるベトナムや、大規模で壮麗なアンコールを築いたクメールがなすインドシナは、古い固有の文明をもつ、という言葉説を、歴代のインドシナ総督をはじめフランス人支配者は繰り返した。もちろん、ヨーロッパによる植民地征服と支配が、「白人」と「有色人種」の優劣という人種主義に立脚していたことはいうまでもない。しかし、「何千年来アジアは特有の倫理、芸術、形而上学、夢を持っている。[...]われわれヨーロッパ人こそ野蛮人である。[...]アジアでは人種的な距離は言うに及ばず、われわれは地球上でもっとも古い文明によって培われた魂と精神に出会うのである」<sup>7</sup>という総督パスキエ Pierre Pasquier (在職1928-1934)の見解に代表されるアジア観ゆえに、帝国主義時代の発展段階説と人種主義にもとづく人類観・文化観においてインドシナはしばしば、最高位にある白人に続くものと位置づけられた<sup>8</sup>。古い王朝文化と農業・手工業・商業の発達した経済的豊かさゆえにインドシナは、大英帝国の「王冠の宝石」にたとえられたインドになぞらえて、フランスにとっての「極東の真珠」とも言い表された。加えて重要な点は、インドシナには植民地化に先立つ独自の王朝があり国家形態をとる政治機構と民族が存在するという見方が、連邦形成初期以来、総督をはじめとする政策担当者にあつたことである<sup>9</sup>。

古い高度な文明と固有の国家制度をもつとされたインドシナにおいては、もともとあつた統治機構を活用するという植民地化の方針が、当初から打ち出されていた。行政機構を整備してインドシナ統治の新たな段階を築いた総督ドゥメールは、土着の政治制度とフランス支配のシステムとを結び付けるといふ基本方針を持っていた。植民地支配の下で旧国家の自立的権力を奪いつつその仕組みだけを活用しようとしたのである。ベトナム、クメール、ラオの各王朝は保護国として温存されながら<sup>10</sup>、たとえばベトナムでは、中国皇帝の政治的影響

を排す目的で科挙が廃止された（1915年）。ベトナム中・北部では、村落制度を温存しながらその自立性を減じ植民地行政に直結させ、旧来の政治機構を住民管理のための補助的道具としようとした。土着の統治機構を徹底破壊せずに活用するという方針は、実際にどれほど実行できた効果的だったかはともかく、インドシナ支配を通じて基本となった<sup>11)</sup>。

フランスのインドシナ観としていまひとつ重要な点は、かつて偉大だったが今は衰退しつつある文明・芸術・文化を復興し保護するのがフランスの役割だという見方である。そのような役割を象徴するのが、アンコールの遺跡であった。アンコールの調査・研究と保存は、国内外から少なからぬ批判を受けていたインドシナの征服と支配を正当化するために、インドシナ進出が金儲けや領土的野心によるものでないことの証明として打ち出された<sup>12)</sup>。フランスがインドシナの高度な文明の一側面として非常に高く評価した工芸・美術についても、退廃し失われつつあるものの復興と保存ということが掲げられた。美術学校について具体的にみてゆく第3章で改めて述べるが、西洋との接触により「真の伝統」を失い衰退しつつある芸術を守ることがフランスの使命だと謳われたのである。そこでは、近代化と進歩の極限にまで到達したヨーロッパ人だけが、近代化の名の下に過去と断絶することがいかに愚かであるかを理解している中で、遅れているゆえに過去や伝統の価値を理解していない原住民を、彼らの伝統や感性を守りつつ導かなければならない、と主張された<sup>13)</sup>。いずれにせよ、古い固有の文明と国家、そして衰えつつはあるが守るべき価値ある芸術をもっているというインドシナ観は、「暗黒大陸」あるいは、個人および集団として自己統治能力を欠く「大きな子ども」とされたサハラ以南アフリカや、人種階梯の最下位に位置し劣っているだけでなく早晩滅びる運命にあるとされたニューカレドニアの先住民に対する見方とは、明らかに異なるものだったといえる。

## 2. 1920年代の統治方針

1920年代のインドシナ政策の特徴は、アジア太平洋という地域空間に目を向けたことであつた。本国との関係よりも、インドシナの置かれている「自然な環境」のなかで発展するという方向性である。その土台にあつたのは、本国からの距離に加え、第一次世界大戦中の本国との断絶の経験であつた。フランスから遠く離れた固有の地域空間において発展するためには、本国行政・政治からの総督府の自立が必要だという認識が強まった。そして、地域での発展とそれに必要な本国からの自立のために、現地人とりわけそのエリート層の協力が不可欠だと考えられたのである。こうして、「フランス・ベトナム協力」collaborat-

tion franco-vietnamienne<sup>15</sup>が1920年代のインドシナ統治の中核的イデオロギーになり、そこで主導的役割を演じたのがアルベール・サロー Albert Sarraut であつた<sup>16</sup>。20世紀初頭より40年近くにわたつて国会議員を務めたサローは、1920年から24年にかけてと32年から33年とに植民地大臣の地位にあり、「サロー計画」の名で知られる植民地大規模開発予算案を数度にわたつて議会に提出する一方、植民地問題に関する著述も精力的に行つた。戦間期に植民地をめぐる議論の中心に位置した彼の思考と行動の基礎にあつたのが、1910年代のインドシナ総督の経験だつた。

# (1) アルベール・サロー

サローは1911年から14年と16年から19年にインドシナ総督を務めた<sup>17</sup>。彼はインドシナ人に敬意ないし愛着を感じる一方で、フランス人入植者に対しては、本国政府の保護を要求し人種主義に凝り固まっていると批判的だつた。「インドシナ人を尊重することがフランスの利益と安全につながる」<sup>18</sup>のであり、抑圧だけでは統治は不可能で寛大かつ公正な政治こそが必要だ、という考えをもつていた<sup>19</sup>。彼は総督着任にあたり、インドシナ地方行政官を歴任してきた現地問題の専門家をスタッフとして起用した。

サローはインドシナ総督府の権限を本国の官僚政治から自立させるために、それを正当化し支える現地代議機関の強化や、その基盤として現地インドシナ人の政治的権利を拡大する「インドシナ市民権」の創設や政治憲章の制定、といった政治制度改革構想を打ち出した。行政改革としては、フランス人官吏の削減を目指し現地人エリートを登用した。フランス人官吏の一部に現地語の習得を義務付けることを提案したり、自身でベトナム語を学習し演説を行つたりしたことは、それまでの政治慣行からすれば衝撃的とも言える行動だつた。また戦時公債の宣伝にベトナムの伝統演劇を活用し、公債購入を呼びかける演目を全土にわたつて巡業させた。もちろん、土着の文化を評価することで現地人の意向を汲もうとする施策が、戦争協力を求める文脈のうちにあつたことは疑いない。サローのこうした「協力」方針は、急進的な即時独立路線よりはフランスとの提携による漸進的な改革と経済発展を志向したインドシナの穏健派・立憲主義者を惹き付けたので、第一次世界大戦後のインドシナの政治展開に実質的なインパクトを持つことになつた<sup>20</sup>。

## (2) 「フランス-ベトナム協力」

サローが本国で植民地大臣を務めた1920年代のインドシナ統治は、彼の総督時代にその下で働いた者をはじめとして、彼のヴィジョンを受け継ぐ行政官に

よって、サローの敷いた路線の上に進められた。この時期の総督たちは、本国の行政府と、インドシナ経済をフランス工業の市場として従属させようとする本国財界ロビーの圧力を受ける議会との桎梏を逃れ、総督府の権限を強めることを試みた<sup>21</sup>。20年代には、行政的な分権と政治的解放の時代となり、その土台には「太平洋は明日の経済・政治の大きな動きの舞台である」<sup>22</sup>という認識が広くあり<sup>23</sup>、そこでの発展のために掲げられたのが「フランス・ベトナム協力」だったのである。

アジア太平洋への地域的関心は、まずもって日本へ向けられた。日本市場への参入ばかりでなく防衛上の協力にも関心をもつて、インドシナは日本への接近を図り、ジョフル Joseph Joffre 將軍やメルラン Martial Merlin 総督（在職 1922-1925）の訪日はそのハイライトであった（対日接近に尽力したのが駐日大使クローデル Paul Claudel である）。オーストラリア、ニューギニア、アメリカにも通商使節の派遣をはじめ積極的に接近した<sup>24</sup>。また経済発展の方向性として、インドシナ内部市場を重視する声も次第に高まった。現地住民の多数を占める階層の購買力を高めることが、経済発展への道だと主張されたのである<sup>25</sup>。

本国からの自立とアジア太平洋という地域空間のなかでの発展は、たとえば投資の面ひとつを考えてみても、人口の圧倒的多数を占める現地人の参加と意欲を引き出してこそ成功するはずのものだと考えられた。そのために「フランス・ベトナム協力」という方針の具体化として、現地人の政治参加と現地文化の尊重が政策課題となっていたのである。現地人も選出される代議機関が連邦レベルから地方行政までの諸段階で設けられていった。確かに現地人の比率はとくに連邦レベルでは人口比にすれば圧倒的に少なく抑えられており、かつその機能は諮問機関的色彩が濃く実質的権限は小さかった<sup>26</sup>。そうではあっても、代議機関は、現地人の考えを支配者側が知る回路として、少なからぬ意味をもつたと考えられる。そうした回路の役割は、現地人が発行する新聞や雑誌によっても果たされていた。また行政機構への登用策として、現地人が帰化しなくても公務に就けるよう制度が改革された。総督府はフランス人官吏に現地語習得を義務付ける案にも前向きだった<sup>27</sup>。

「フランス・ベトナム協力」は、総督パスキエの言葉を借りれば、フランスが定め主導する枠組みのなかでインドシナ（ベトナム）の民族感情 sentiments nationaux を引き出し尊重しようとするものだった<sup>28</sup>。そして、インドシナの文化的独自性を前提として現地文化を尊重するという方針が鮮明に具体化されたのが、教育政策であった。

インドシナの教育政策の最大の特徴は、初等教育における現地語による教育



と、高等教育制度の整備であった。前者の点については、教授語としての現地語(ベトナム語のローマ字表記であるクオックグー、クメール語、ラオ語など)の使用は、他のフランス領植民地では行われなかった<sup>29</sup>。現地語による教育は、インドシナの初等教育の普及率がフランス領一の高さを示したことで密接に関連していた。クオックグーを民族語 *langue nationale* と位置づけその普及と文学的發展を目指した文筆家フラム・キン Pham Quynh の編集する雑誌 *Nam Phong* (『南風』)が総督府の助成金を受けていたことは、現地のナショナルな文化に対する積極的評価を示す事例である<sup>30</sup>。またインドシナ現地の歴史や地理が教えられ、道徳や言語の教育内容には土着の生活習慣が盛り込まれた<sup>31</sup>。

一方、ハノイにはフランス領植民地で唯一の大学であるインドシナ大学が設置され1917年に本格的に始動した。医、法、土木建築が主な学部として学生数が多く、ほかに教育、獣医、商、農の学部があった。インドシナ美術学校はこの大学の芸術学部として開校されることになるのである。中国古典と科学に集約される伝統的な権威と、ナショナルリストの一部が近代化のモデルとみなした日本との影響を除き、フランスの意図を体现する新世代のベトナム人協力者を育てることが、この大学の目的であった<sup>32</sup>。1920年代には本国への留学生が増加し、それに対応して1930年にパリの国際学生都市にインドシナ館が開館した<sup>33</sup>。

### 3. インドシナ美術学校

#### (1) 設立の経緯

インドシナ美術学校に結実することになる、フランスの芸術教育政策の土台にあったのは、先にも触れたような、衰退しつつあるものの保存・復興という考え方だった。19世紀初めまでは繁栄していたが西洋との接触により固有の技法や美意識や職人が失われる一方で、アジアの工芸品がヨーロッパの市場でもてはやされたため、土着の要素と西洋の影響を混合した安っぽい偽物ばかりが作られて芸術は衰退し、危機にある「真の伝統」を正しく守らなければならぬ。アンコール芸術の復興と保存を目的としたカンボジア美術学校の校長を務めた画家・考古学者・文筆家グロリエ Georges Groslier のこのような見解は、代表的なものであった<sup>34</sup>。

伝統的技法が、口承や作業経験といった非体系的な継承方法ゆえに喪失の危機に瀕している状態への対策として、職人の育成を目的とする美術学校が20世紀初頭より第一次大戦前までに、コーチシナ、ラオス、ハノイ、フエ、プノンペンなど8箇所に開校された。ここでは、カンボジアやベトナム南・北部といった各地域に特徴的な技法の保存・継承とらんで、それを通じてヨーロッパ

場の需要に 대응することが目標とされていた。インドシナ経済の資本主義化を担う技能職の養成が目指されていたわけである。教員の少なからぬ者はフランスから渡航し、これらの学校の教員はパノイのリセの美術教師とならんで、インドシナ在住のフランス人芸術家の主流をなしていた<sup>35</sup>。

インドシナ美術学校の設立をみるためにはまず、インドシナ賞に触れなければならない。これは1910年に創設された、インドシナ総督府より優勝者にインドシナ旅行の賞金が与えられる公募絵画コンクールである。同じ時期に同様の絵画コンクールと旅行賞金が、北およびサハラ以南アフリカ、マダガスカルなどについて相次いで創設された。それらは、優れた芸術家に植民地を見聞する機会を与え、美術作品を通して遠い植民地をフランス本国に紹介させると同時に、植民地においてフランス芸術を広めることを期待していた<sup>36</sup>。

インドシナ美術学校の創設者として、今日でもベトナム近代美術史上の最重要人物の一人とみなされているタルデューVictor Tardieu (は、1870年にリヨンに生まれ、リヨン次いでパリの美術学校に学び、モロー、マチス、ルオーなどのアトリエで研鑽を積み、1920年のインドシナ賞受賞を期にインドシナへ渡った。インドシナ大学の講堂の装飾など公共建築の注文を受けたため長期滞在することになり、1923年に美術学校について総督府より打診を受けた<sup>37</sup>。1924年10月27日の法令 *arrêté* によってインドシナ大学芸術学部として美術学校を設立することが公布され、「タルデュー氏の報告の内容にある提案に沿って」<sup>38</sup>、翌1925年の新学期に開校の運びとなった。

## (2) 目的と運営

美術学校の目的について総督府は次のように述べている。「現地人の進歩した芸術家を、西洋芸術の影響のもとに、しかし極東とりわけ中国とベトナムの芸術の感覚のなかで、育成することが目的である。[...]現地の芸術の真の再生の担い手をつくりだすことである」<sup>39</sup>。また翌年に同学校内に開設された建築学科では、「見識も批判精神もないままに古い形式を作り出す学校ではなく、在来の伝統を尊重しながらも近代的な伝統に適合する、そうした学校を創り出すこと」<sup>40</sup>が目指された。インドシナと西洋の融合によってインドシナ芸術に生気を吹き込み、これを再生させることが、美術学校の目的として掲げられたのである。加えてタルデューは、職人ではなく芸術家の養成ということを強く意識していた。匿名の技能者ではない、個人の内面を表現する芸術家という概念じたいが西洋起源のものであり、中国をはじめ東洋にはないものだった<sup>41</sup>。東西の芸術技法と美学・哲学との融合により、新しいタイプの芸術と芸術家を創り出すことが目指されたといえる。



いまひとつの目的として、現地人官吏の育成を上げることができた。学校設立の法令では、既存の美術関連学校の教員の養成がうたわれていた。また建築学科も、総督府の土木建築部門が要する技師や建築家を養成することを掲げていた<sup>42</sup>。1925年という開校の時期は、現地人官吏の育成と入学者の質の向上および均質化を目的としたインドシナ大学の組織改革と重なっていた<sup>43</sup>。タルデューの主導した、東洋と西洋の技法と芸術精神を併せ持つ芸術家を育成する学校は、行政機構の現地人化という1920年代の統治方針の一環に位置づけられるものでもあったわけである。

学校の課程は5年間だった<sup>44</sup>。全般的な組織と教育内容は、古典的芸術教育によってフランス絵画・建築の伝統を守るパリ美術学校を踏襲し、パリの古典的カリキュラムに、東洋の芸術技法の調査研究と教育・応用が加えられたものだった。絵画としてはデッサン、油絵、絹絵、漆絵が教授された。西洋芸術の主流をなす前二者に対し、後二者はベトナム独特の技法として内外より今日でも高く評価されているものである。とりわけ漆絵は日本での展覧会でも、食器としてなじみ深い漆による絵画表現が、驚きとともに親しみを観る者に感じさせ、筆者も強い印象を受けた。この漆および絹の技法は実は、インドシナ美術学校の教育課程のなかでフランス人教師とベトナム人教師が開発あるいは確立したもので、古来の「伝統」を墨守あるいは復興したわけではなかった。植民地統治機構の一環をなす教育機関がベトナム美術の新しい「伝統」を創出したのである<sup>45</sup>。

タルデューは優秀な教育者の確保のために、インドシナ賞受賞者を2年間インドシナに滞在させうち1年は美術学校の教員を勤めさせることにした<sup>46</sup>。他にもフランス人教員が赴任した一方で、インドシナ人教員はパリ美術学校の留学生とインドシナ美術学校の卒業生が占めていた。教員は基本的に、パリ発の古典的美術教育の体現者だったといえる<sup>47</sup>。

インドシナ美術学校という名称にもかかわらず、生徒の大半はベトナム北部出身だった。入学試験の倍率は年や学科にもよるが5倍から10倍で、かなりの難関だったようである<sup>48</sup>。1930年代なかばまで毎年50から60人が入学という規模をおおむね維持した<sup>49</sup>。先に触れた、大戦前に連邦各地に開校されていた美術学校のほうは、1920年代には常時合計で1000人以上の生徒をかかえており<sup>50</sup>、芸術家育成より職業教育のほうが人数的には主流だったことがわかる。

### (3) 教育の成果

卒業生は主として高校や芸術関連学校の教員になるほか、個人で芸術家あるいは職人として生活する者もあった。1934年にはタルデュー自身を会長として

アンサン芸術工業振興協会 Société amantite d'encouragement à l'art et à l'industrie が結成され、美術学校内に事務局を置いた<sup>51</sup>。芸術の振興と卒業生の就職および仕事の支援を目的とし、ハノイで公募コンクール展を催した。インドシナ画家の作品はパリでも好評を博し、最初の卒業生が出た年にはやくも、パリのコンクール展で二人の生徒が入賞した<sup>52</sup>。また植民地省の広報・宣伝を担当したインドシナ経済機関 Agence économique de l'Indochine も、インドシナ美術学校で育った芸術家の展覧会をパリで開いたが、これは開会式に大統領とアンサン皇帝がそろって臨席するほどの重要な国家行事として行われた<sup>53</sup>。さらにインドシナ画家の作品は外国でも紹介され、ドイツ、ベルギー、そして日本などで展覧会が開かれた<sup>54</sup>。

建築分野では、学校で研究され教育された在来建築の技法が、生徒の作品に応用されていた。こうして育成されたベトナム人建築家は、成長してきたベトナム現地人資本の、各種施設や住宅の建築需要にこたえるなかで「ベトナム的」装飾を応用し、「アンサン様式」ともいわれるフランスとインドシナの折衷様式を発展させた<sup>55</sup>。

インドシナ総督府の法令に基づいて設立されたインドシナ美術学校は、1920年代の「フランス・ベトナム協力」という植民地統治方針と、失われゆく偉大な伝統を救う使命という芸術観とに立って、東洋と西洋の芸術の技法と美学を融合させることによって、東洋芸術の消滅を防ぐと同時に新しい芸術を創造しながら植民地統治機構を補完する、そうした人材を育てることを目指したのであった。

#### 4. 1930年代の変化

1930年代には、フランスの統治方針の変化と、それに連動したと考えられる美術学校の変容を観測できる。アメリカ合衆国に端を発した大恐慌が世界に波及すると、本国と植民地がなす保護主義的な帝国ブロック経済体制の構築が目指されるようになった<sup>56</sup>。一方で1930年代初頭には、急進的な反仏運動が高揚した。1930年から翌年にかけてベトナムの中・北部で、共産主義者や学生・知識人が主導する、未曾有の規模の反仏農民反乱が起こった。この反乱は過酷な弾圧を受け、創生期のベトナム共産党は壊滅的な打撃を受けたが、総督府と本国政府は、地主の権威に盲従し作物の出来と天候を心配するのに精一杯で政治意識を持つための時間も教育もないとみていた小農大衆が立ち上がったことに、強いショックを受けた。また1931年にパリで国際植民地博覧会が開かれた際に、シュールレアリストや共産主義者が、植民地支配を糾弾する「反植民地博

覧会」を開いた際、これにベトナム人留学生が大きく関わっていた。植民地省は留学生を中心とするベトナム人がパリで国際的な反植民地運動に加わっていることに神経を尖らせており、インドシナ人運動家を追跡するための専門の部局を省内に設置した<sup>57</sup>。1930年にパリの大学都市にインドシナ館が開館したが、表向きは留学を奨励するものとされたこの施設を監視の強化のためとみなした。在仏インドシナ人留学生は、反対運動を行った<sup>58</sup>。

反仏運動の高揚の原因は、フランス式の教育を受けたベトナム人が普遍的平等思想やナショナリズムや革命思想に感化されたことだ、という声が高まった。「われわれの思想を身に着けた者たちが危険な敵に転化する」という懸念は、1920年代よりすでにあったが、1930年代にはさらに強まった<sup>59</sup>。社会学者モニエ René Maunier は1930年代に刊行され第二次大戦後まで版を重ねた大著『植民地社会学』のなかで、「アンナン人やジャワ人など文明化された者たちにおいては、教育の進歩が悪影響をもたらす懸念がある。[...]教育の進歩によって、学生こそが紛争において第一の役割を果たすことになった。[...]それは[指導者]フランスの刺激と扇動によるものだったのだ」<sup>60</sup>と述べた。そのような批判や警告のなかで強調されるようになったのが、西洋ないしフランスの影響が、インドシナ古来の家族主義や家長権や上位者への服従といった伝統的モラルを後退させたことが問題だという見方である。インドシナ人がヨーロッパ体験を通じて過去と断絶し根無し草と化すことは危険であり、現地固有のアイデンティティを尊重すべきなので、「伝統主義」に基づいてインドシナ文明を理想化する、といった態度が、1930年代のインドシナの高官層には広く共通してみられた。

総督パスキエはその代表格で、「古い慣習 [...] 尊重すべき伝統 [...] アジアの古い建造物を決して破壊しないようにしよう。思想を育てる『独自性』を尊重しよう。[...] われわれが発見したときと同じ状態を維持しよう」<sup>61</sup>と述べていた。インドシナ人学生の取り締まりを統括した部局の責任者は、「彼らにとつての自然な環境に戻し祖先崇拜の伝統に戻すことにより危機から回復できよう」<sup>62</sup>との見解を表明した。上位者への臣従をベトナム固有の価値として称揚することで、被支配者の従属と秩序を再建しようとしたのである。この時期のインドシナ統治者が盛んに言った、「有機的社会」「自然な共同体」といった考え方は、やがてヴァイシー時代の体制や思想とも関連を持つことになる、本国の右翼保守派と親和的なものだった。またフランス人入植者は、現地人の経済的・精神的な近代化には反対だった<sup>63</sup>。

以上のような政治動向のなかで、教育政策にも明白な転換がみられた。第一に、実用的な実技教育が重視され職業学校が増設される一方で、理論的・抽象的な教育内容は後退し大学教育が縮小された。インドシナ大学の教育内容は本

国に比べれば低レベルだと設立当初より評価されていたのだが<sup>64</sup>、医学、法学、そして美術以外の学部は1937年までにすべて閉鎖されてしまった<sup>65</sup>。第二に、フランス人とインドシナ現地人との間の分離が強化された。それまでは混合だった高等学校が、1935年にフランス人学校と現地人学校に分けられた。そして現地人向けのカリキュラムにおいては、土着の古い価値や道徳、固有のルーツ、真のベトナム性、といった内容が重点化された。1931年の植民地博覧会に際して開かれた教育に関する国際会議がうたったように、「彼ら自身の環境により適合し、彼らの文化的遺産により沿った」教育をというわけであった。また、警察の監視と管理の強化や行政による恣意的な制限措置によって、現地人のフランス留学がしだいに困難になっていった<sup>66</sup>。

以上のような1930年代の植民地の政治環境とそれに基づく統治方針の変化は、美術学校にも明らかな影響を及ぼした。1937年、タルデューの死去に伴い着任した2代目校長ジョンシェール Evariste Jonchère は、職人養成を重点化し、学校の名称じたいも美術応用芸術学校 Écoles des Beaux-Arts et des Arts appliqués と改めた<sup>67</sup>。また学校の規模がにわかに縮小され、1938年には、前年まで50余名だった入学者数が35人に急減した。

インドシナ美術学校は、東洋と西洋の要素とともに尊重し融合することによるインドシナの発展を掲げる1920年代の方針から、1930年代後半の、西洋あるいはフランスとインドシナとの差異を強調し後者を前者の影響から遠ざけることで、動揺する植民地支配体制を立て直そうとする方向へという、統治方針の基本路線の変化を、正確に反映していたのである。

## おわりに

フランスによる植民地統治機構の一翼を担うものとして設立・運営されたインドシナ美術学校は、それが組み入れられていたインドシナ大学の基本方針と同様に、フランスの意図を体现するベトナム人協力者を育てることを目的としていた。それが今日のベトナムでは、ベトナム美術史上に新たな展開をもたらしたものであるとして高い評価を受けている。ベトナム政府の公式見解はこの点について明白である。

1925年は、20世紀ベトナム美術の歴史のなかで記念すべき年となった。この年、ハノイにフランス人によってインドシナ美術学校が創立されたからである。以後20年の間、このフランスの学校、特にその初代校長ヴァクトール・タルデューは、ベトナム美術の劇的な変化に偉大な貢献をなした。[...] 彼が東洋の伝統を尊重したことで、ベトナム人としての芸術を生徒たちに

築き上げさせたことに、われわれは彼の価値を見出すのである<sup>69</sup>。

またあるベトナム美術史家も、「タルデューや〔漆絵科を創設した〕アンガンベルテイらは、現在もなお、ベトナムに近代絵画と伝統を与えた人物として、尊敬の念をもって記憶されている」と論評している<sup>70</sup>。

フランスのインドシナ支配が、被支配者をあくまで政治・社会的に劣位にとどめ、重税、プランテーションでの重労働、アヘンの専売などに代表されるような搾取と強制を行ったことは、まぎれもない事実である。インドシナの反植民地・反フランス運動は他地域にも増して早く生まれ長い歴史を有し<sup>71</sup>、独立への道は激しい戦いとなった。しかし一方で、植民地化が、支配・被支配関係には収斂しない、人と文化のさまざまな接触、せめぎあい、かけひきを生んだ、きわめて複合的な歴史現象だったことを、このたびの展覧会は例示したといえよう。インドシナ美術学校で学んだ芸術家たちの内面を感ずることは本稿の守備範囲を大きく越える問題である。少なくとも、植民地統治機構である学校で得た技法や知識そして出合いの機会を通じて、自らの芸術的インスピレーションを表現していった芸術家たちの作品を、ベトナム近代美術の名品と位置づけることで、独立したベトナムは、フランス支配の遺産を自らの豊かさの源泉とすることに成功したという意味で「勝利」をうたっている、という解釈は可能である。

## 注

- 1 この展覧会は2005年の東京ステーションギャラリーを皮切りに、和歌山県立近代美術館、高知県立美術館を巡回した。
- 2 この学校名の日本語訳は、同展覧会が用いた「インドシナ美術学校」を踏襲する。
- 3 Bezançon, Pascale, *Une colonisation éducatrice? L'expérience indochinoise (1860-1945)*, L'Harmattan, 2002 ; Kelly, Gail, *Franco-Vietnamese Schools 1918 to 1938* (Doctor of Philosophy Thesis), University of Wisconsin, 1975 ; Trinh, Van Thao, *L'école française en Indochine*, Karthala, 1995 ; 岡田友和『フランス領インドシナにおける「植民地国家」の建設—1920年代ベトナムの現地人教育政策をめぐって—』東京都立大学修士論文、2004年。黒澤和裕「ベトナムにおけるフランスの植民地教育」『二十世紀研究』第3号、2002年。広本克行「ベトナム教育運動史—民族解放と社会変革の主体形成—」『世界教育史体系6 東南アジア教育史』講談社、1976年。
- 4 André-Paillois, Nadine, *L'Indochine : un lieu d'échange culturel ? Les peintres français et indochinois (fin XIX<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle)*, Presse de l'École française d'Extrême-Orient, 1997.
- 5 参考、石井米雄・桜井由躬雄『東南アジア史 (大陸部)』山川出版社、1999年。桜井由



- 英雄・石澤良昭『東南アジア現代史 ウェトナム・カンボジア・ラオス』山川出版社、1977年。坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史』東京大学出版会、1991年。平野千果子『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。ヤコノ、グザヴィエ（平野千果子訳）『フランス植民地帝国の歴史』白水社、1998年。
- 6 といえ、たとえば古代の文明・芸術に注目する場合には、カンボジアのアンコールが仏領インドシナの象徴とされるといった事例もある。
- 7 以下の本稿の引用文中では、〔 〕内は筆者による補遺を、〔…〕は中略を表す。Brocheux, Pierre et Hémery, Daniel, *Indochine, la colonisation ambiguë*, La Découverte, 1995, p. 213.
- 8 もちろん、人種のエスラルキーに関する考え方は単一でも固定的でもなかった。白人に続くのはヨーロッパに近い北アフリカのアラブ人であり、「黄色人種」はその次に位置づけられるといった人種観も多く見られた。
- 9 André-Pallois, *op. cit.*, p. 272; Brocheux et Hémery, *op. cit.*, p. 78; Morlat Patrice, *Indochine années vingt : le balcon de la France sur le Pacifique*, Les Indes savantes, 2001, p. 230.
- 10 保護国化は、直轄統治への過渡的段階ではなく恒久的な制度として採用され、そのこととはインドシナが「新しい形の植民地」であることを意味するものとみなされた。Fourniau, Charles, *Annam-Tonkin 1885-1896 : Lettres et paysans vietnamiens face à la conquête coloniale*, L'Harmattan, 1989, p. 103.
- 11 Brochex et Hémery, *op. cit.*, p. 83, p. 102, p. 205; Thomas, Martin, *The French Empire between the Wars*, Manchester University Press, 2005, p. 228. 土着の機構を温存するという方針は同時に、進歩的あるいは民主主義的とみなされた改革を阻止する論理としても機能した。
- 12 Cooper, Nicola, *France in Indochina : Colonial Encounters*, Berg, 2001, pp. 69-79. ダジヤンス、フリエノ（石澤良昭監修）『アンコール・ワット』創元社、1995年。
- 13 Wright, Gwendolyn, *The Politics of Design in French Colonial Urbanism*, The University Chicago Press, 1991, p. 197.
- 14 Giacometti, Jean-Dominique, *La question de l'autonomie, entre colonies et domination ?* (thèse), Université de Provence, Aix-en-Provence, 1997, p. 17, p. 20.
- 15 ベトナムの代わりにアンナンという語も互換的に使われた (collaboration franco-annamite)。アンナンはベトナム王朝の首都がおかれた中部地方の呼称であり、いずれの場合も、協力の対象として想定されたのがほぼベトナムに限定されていたことを示している。
- 16 ただしラシエルは「協力」という統治方針に1900年代からの継続性がみられることを強調している。Larcher, Agathe, «La voie étroite des réformes coloniales et la “collaboration franco-annamite” (1917-1928)», *Revue française d'histoire d'outre-mer*, tome. 82, no. 309, 1995, pp. 391-393.
- 17 彼は歴代の植民地大臣のなかで植民地現地経験が最も長かった。Morlat, *op. cit.*, p.



- 225.
- 18 *Ibid.*
- 19 Giacometti, *op. cit.*, p. 72.
- 20 Buttinger, Joseph, *Vietnam: a Political History*, Prager, 1968, pp. 137-142 ; Larcher, art. cit., pp. 404-418.
- ところで植民地政策を論じる際に、イギリスの間接統治に対するフランスの直接統治ないし同化主義、さらにはそのフランスの同化主義から協同主義への移行、といった図式がしばしば示されてきた。ここでは、フランスの制度を植民地に移植しようとする同化主義が世紀転換期以降批判され、第一次大戦後には、現地の慣習と伝統的首長層の権威を活用しようとする協同主義に本格的に移行したと説明され、その協同主義の最大の推進者としてサローが挙げられた。しかし近年では、協同主義を19世紀後半以来の継続的なものとみる見解も提出されている。一方で、自由・平等・博愛の普遍的価値を伝播させる文明化の使命という共和主義に基礎をもつ意味での同化主義は、フランス共和国の根本的な植民地イデオロギーであり続けた。統治方針は時期および地域による違いが大きく、結局第三共和政の植民地政策は1890年代以降つねに同化と協同の両方だったのであって、両概念による時代区分は無意味かつ不可能であり、また左右の政治的な色分けも明瞭な線引きからほど遠かった。サロー自身、自らの政策を呼ぶために「同化」association とならんで「協力」collaboration の語も多用し、またいわゆる「同化」assimilation の眼目のひとつとみなされるフランス語の大衆的教育を主張していた。主な文献として以下を参照。Ageron, Charles-Robert, *France coloniale ou parti colonial ?* PUF, 1978, chapitre 6 ; Betts, Raymond, *Assimilation and Association in French Colonial Theory*, New York, Columbia University Press, 1961. ; Brunschwig, Henri, *L'Afrique noire au temps de l'Empire français*, Denoël, 1988, pp. 19-22; Conclin, Alice, *A Mission to Civilize : The republican Idea of Empire in France and West Africa* 1895-1930, Stanford University Press, 1997; Sarraut, Albert, *La mise en valeur des colonies françaises*, Payot, 1923 ; 平野、前掲書、72-81, 125-137, 187-192, 197-200, 223-230ページ。小熊英二『〈日本人〉の境界』新曜社、1998、第7章。
- 21 Brocheux et Hénery, *op. cit.*, pp. 291-292; Morlat, *op. cit.*, p. 205.
- 22 Sarraut, *op. cit.*, p. 22.
- 23 Giacometti, *op. cit.*, p. 17, pp. 74-75.
- 24 Giacometti, *op. cit.*, pp. 17-58; Morlat, *op. cit.*, pp. 61-76, 308-319.
- 25 Marselle, Jacques, *Empire colonial et capitalisme français, histoire d'un divorce*, 2005 (1<sup>ère</sup> édition 1984), Albin Michel, pp. 325-337.
- 26 Brocheux et Hénery, *op. cit.*, p. 109.
- 27 *Asie française*, juillet-août 1928.
- 28 Morlat, *op. cit.*, p. 205.
- 29 Léon, Antoine, *Colonisation, enseignement et éducation*, L'Harmattan, 1991, pp.

- 63-64.
- 30 Brocheux et Hémery, *op. cit.*, p. 221; Le Calloch, Brenard, «Le rôle de Pham Quynh dans la promotion du quoc ngu et de la littérature vietnamienne moderne», *Revue française d'histoire d'outre-mer*, tome. 72, no. 268, 1985, pp. 391-393.
- 31 Lebovics, Harman, *The True France : The Wars over Cultural Identity, 1900-1945*, Cornell University Press, 1992, pp. 111-113.
- 32 Trinh, Van Thao, *op. cit.*, p. 50, p. 73.
- 33 *Asie française*, avril 1930 ; *Le monde colonial illustré*, 1928, p. 192.  
また「協力」の対象となるベトナムないしそれを含む東洋についての知識の必要性が改めて認識され、極東古典の学術研究が奨励された。岡田、前掲論文、56ページ。
- 34 André-Palloys, *op. cit.*, p. 153, p. 208; Brocheux et Hémery, *op. cit.*, pp. 224-225; Wright, *op. cit.*, pp. 231-233.
- 35 André-Palloys, *op. cit.*, p. 150, pp. 209-212.
- 36 André-Palloys, *op. cit.*, pp. 65-68, 96-149.
- 37 André-Palloys, *op. cit.*, p. 110. 後小路雅弘「美術学校」『ベトナム近代絵画展』（展覧会図録）、2005年、30ページ。
- 38 André-Palloys, *op. cit.*, p. 215. pp. 283-284.
- 39 Gouvernement général de l'Indochine, Direction générale de l'Instruction publique, *Le Service de l'Instruction publique en Indochine en 1930*, Hanoi, Imprimerie d'Extrême-Orient, 1931, p. 121.
- 40 André-Palloys, *op. cit.*, p. 216.
- 41 André-Palloys, *op. cit.*, p. 214.
- 42 Gouvernement général de l'Indochine, Direction générale de l'Instruction publique, *op. cit.*, p. 122.
- 43 *Asie française*, août-septembre 1926.; Cooper, *op. cit.*, pp. 37-38.
- 44 創設時点では3年だったがすぐ延長された。André-Palloys, *op. cit.*, p. 215.
- 45 André-Palloys, *op. cit.*, p. 157. 林田龍太「『ベトナム美術学校』のフランス教師たち」『ベトナム近代絵画展』（展覧会図録）、2005年、65ページ。
- 46 学校開校とともに、総督府はベトナム賞に関する法令を変更した。*Asie française*, août-septembre 1925.
- 47 André-Palloys, *op. cit.*, p. 67, pp. 217-218.
- 48 Gouvernement général de l'Indochine, Direction générale de l'Instruction publique, *op. cit.*, p. 122.; André-Palloys, *op. cit.*, p. 218. 後小路、前掲論文、30ページ。
- 49 Gouvernement général de l'Indochine, Direction des affaires économiques, *Annuaire statistique de l'Indochine*, Hanoi, Imprimerie d'Extrême-Orient, 1931, p. 88.
- 50 Ibid.
- 51 後小路雅弘「ベトナム美術学校と近代美術の幕開け 1925年～1945年」『ベトナム近

- 代絵画展』(展覧会図録)、2005年、25ページ。
- 52 Gouvernement général de l'Indochine, Direction générale de l'Instruction publique, *op. cit.*, p. 121.
- 53 *Asie française*, juin 1932.
- 54 André-Pallois, *op. cit.*, pp. 220-223。1930年代末期から1940年代初頭の日本美術界はインドシナ美術に多大な関心を示していた。美術家団体の現地視察旅行が行われ、雑誌『国民美術』が特集号を組みそこでインドシナ美術学校にも注目している。後小路雅弘「ベトナム近代美術の『近代』」『ベトナム近代美術展』(展覧会図録)、2005年、20-22ページ。
- 55 Gouvernement général de l'Indochine, Direction générale de l'Instruction publique, *op. cit.*, p. 122; Wright, *op. cit.*, p. 199。増田彰久・大田省一『建築のハノイベトナムに誕生したパリ』白揚社、2006年、12、128ページ。
- 56 Marseille, *op. cit.*, pp. 246-247, 282-284.
- 57 Brocheux et Hémery, *op. cit.*, pp. 304-309; Lebovics, *op. cit.*, p. 115; Thomas, *op. cit.*, p. 228.
- 58 *Asie française*, avril 1930.
- 59 Brocheux et Hémery, *op. cit.*, p. 219; Léon, *op. cit.*, p. 28。インドシナでのナシヨナリズムやコミューニズムに対する懸念は論壇で1920年代後半より目立つようになる。
- 60 Maunier, René, *Sociologie coloniale, tome II*, Domat-Montchrestien, 1936, p. 218.
- 61 Brocheux et Hémery, *op. cit.*, p. 108.
- 62 Lebovics, *op. cit.*, p. 104.
- 63 *Asie française*, avril 1931; Brocheux et Hémery, *op. cit.*, pp. 107-108; Lebovics, *op. cit.*, pp. 117-119.
- 64 *Asie française*, janvier 1927.
- 65 Kelly, *op. cit.*, p. 79.
- 66 Lebovics, *op. cit.*, p. 100, pp. 114-115, 117-119。岡田、前掲論文、55ページ。
- 67 ここでの応用 appliqué という語は、理論・抽象に対する技能・「手に職」のイメージを喚起するものである。アンドレ・ペロフによれば今日のベトナムでは、芸術家の育成を掲げたタルデューがベトナム美術史に偉大な功績を残したと称えられているのに対し、ジョン・ジエールへの言及は圧倒的に少なく彼に対する評価は低い。André-Pallois, *op. cit.*, pp. 216-217.
- 68 Gouvernement général de l'Indochine, Direction des affaires économiques, *op. cit.*, p. 39.
- 69 ベトナム文化情報省美術写真局「20世紀のベトナム美術—概説—」『ベトナム近代美術展』(展覧会図録)、2005年、9ページ。
- 70 林田、前掲論文、65ページ。
- 71 Thomas, *op. cit.*, p. 228.

松 沼 美 穂

福岡アジア美術館での「ベトナム近代絵画展」に筆者がかかわる機会を与えてくださった美術館関係者の方々に、記して謝意を表したい。